

異国人にも 優しかった(?) 図書館

半田 祐司

1993年4月から一年間、ドイツ・ボン大学の法哲学研究所で留学研修する機会を得た。戻ってみると、早速、大学図書館について一文をものするよにとの要請があった。極めて大まかな雑感に留まることで御勘弁願いたい。

ボン大学には、大学本部から少し離れて、ライン河畔を望む所に、中核的な機能を持つ大学図書館がある。ここでは、たくさんの司書が、窓口で学生のさまざまな要請に答えていた。見晴らしのいい位置にしつらえられた白習用の机に向かって勉強している学生達。時に、顔を上げラインを往来する船を眺めて、疲れを癒している姿も見える。とにかく、よく勉強しているとの印象をもった。

この大学図書館の前をコブレンツ市に至る道路が走っているが、その道路の向かい側に、法及び国家学部の建物(ユリディウム)が建っている。その1階と地階に法学部の図書館があり、必要な文献は、たいていここで見る事ができた。ここは、開架式を採っていて、大きく仕切られた各部屋の壁に書架を設置し、中央に学生用の机が並んでいる。日本ではなかなか手に入らない稀覯本の類が、惜しげもなく(?)無造作に置かれているのに遭遇すると、思わず手を取って撫でてみたくなるような衝動に駆られ、こんなところに置いて大丈夫なのかとも思ってしまった。しかし、それも、ほとんど机の空きがない状況で書架から持ち出してきた多くの本を広げている熱心な学生達の姿に応えるものであるとすれば、こんなエゴイスティックな感慨を持ったのは不謹慎なのかもしれない。そればかりか、法学図書館では、学生の利用頻度の高いもの(講義担当の教授の教科書や、分厚く、したがって高価な注釈書・コンメンタールの類)は、それぞれ十数冊を用意して学生の利便に供してもいる。そのような事情も手伝ってか、学生は、ほとんどこの種の本を購入することをし



ないで、コピーで間に合わせ、講義に出るときも関連法規の小冊子とノートだけで、教科書を持参している学生は余りいなかった。

また、この建物の東西に、8階建ての東塔と西塔が建っていて、そこに法律関係の各ゼミナール・研究所が入っている。そのゼミナール・研究所には、教室とそれぞれ専門の文献を持つ、いわば図書室が配置されている。しかし、その程度のものであっても、同じく図書館(ビブリオテーク)と呼ばれている。そこには、アルバイトの学生がいて、文献の貸出に応じてくれたり、教授秘書が関わってくれたりする。

私が世話になった法哲学研究所では、このビブリオテークに私専用の机を用意してくれて、研修に備えてくれた。ライン川に面した窓際に沿って、外国から来たわれわれのようなゲスト・プロフェッサーの机が並び、窓と窓との間の柱には、先代や先先代の主任プロフェッサーの写真が架けられている。週に一度この場所で、助手やドクター論文を準備中のドクターラントを交えて、ゼミナールが行われている。ゼミは夕方6時から始まったが、羨ましくも、それがここでの習慣であるらしい。

学生達の教授や助手に対する、速射砲のようなドイツ語の質問をよそに、しばしば自分の日が、書架に並んでいる本の背表紙を追っているのに気付いて苦笑したことも、懐かしく思い起こされてくる。全身を耳にしている、きちんとは捉えられないドイツ語が恨めしく思ったのとは逆に、むしろそれだけいっそう、瞬時に消えてはなくなる活字の頼もしさや「本」の有り難さを、図書館の一隅にたずみながら、この私は、しみじみと噛みしめたことであった。(法学部教授)

